平成２６年度しおあなの森保育園　事業報告

　民営化から3年が経過し、園全体も緊張から解き放たれた雰囲気になってきた。保護者とも、仲良い関係が築かれてきて、保護者や園に伝えたかったけれど、なかなか言えなかったこともお互い伝え合えるようになってきたと感じられた年であった。

**１．保育について**

　３年目は、今まで以上に、「毎日の生活を大切にすること」「子どもの気持ちや意見を尊重すること」「実体験を積み重ねること」を大切に保育を積み重ねてきた。

生活習慣など、毎日の単調な繰り返しも、人として生きていくことにおいては大切なことであることを全職員で確認し、1年間を通して一日の流れを同じにすることで見通しを持って生活するようになってきた。9時までの登園と規則正しい生活の必要性を機会があるたびに訴えてきた結果、徐々に成果が出てきた。

表現活動などはどの年齢も年間通してとりくんだ。生活発表会で5歳児が演じた「泣いた赤鬼」の劇では、全員が真面目に、意欲を持って取り組んだら、観客を感動させるだけでなく、子どもたち全員が大きく成長することを証明した。

幼児組では菜園を使っての保育が日常的になされるようになった。苗を間違って購入した結果、なすとピーマンの苗の違いをしっかりとわかるようになったことや、やっとできた米粒を雀に食べられたり、ゴマの選別ではみんなが「もういや！」と言うくらい一粒づつつまんではごみを取り除く作業をしたことなど、楽ではない菜園活動や毎日地道に世話をする経験をした。いい加減な気持ちでは作物が育たないことなど、失敗から学ぶことも大変多かった。

　年長児の保育では、『染める』ことを1年通してとりくんだ。さくらの花びら染め、玉ねぎの皮染め、種から育てた藍での藍染、うまく色が固定されたのは玉ねぎ染めだけで、失敗の連続だった。こいのぼりの鱗を作るために桜の花で染め、きれいなピンク色に染まって歓声を上げたのに、洗ったとたん、すーっと消えていったことなどは落胆が大きかっただけに、子どもたちの記憶の中にしっかりとその経験が残ったことと思う。

肢体不自由を伴った障がい児を受け入れた事で、他の子どもたちは、その子たちの前向きな挑戦する姿から、「やればできる」ということを学んだ。

年間の延べ保育対象児童数は、1,898人で月平均158人(定員150名)であった。ちなみに昨年度は月平均160人だった。

**２．延長保育の利用について**

　年間で延べ609人で、昨年の774人を下回った。19時を超える利用も時々あった。

**３．一時預かり**

年間の利用件数は　169　件で昨年の203件より少なくなった。他園で受け入れが少ない年度末や年度初めの３．４．５月も積極的に受け入れた。年間通して毎週３回利用された人や障がいを持った子どもも預かった。他園の入園が決まったけれどそこでの一時保育が利用できないため、3月には当園を利用する人が増えた。

**４．子育て支援**

　園庭開放(毎週水曜日の午前)には年間通してよく参加され、参加者は500人を超えた。多い時は親子で48人(やきいも大会)が参加されたこともあった。午後に運動場で自由に遊べる園庭開放もコンスタントに利用がある。一方、サークルを作って利用する子育て支援室の利用は年間通してあったが、17件だった。

**５．交流保育について**

２５年度から、敬老の日の前週に入園児のおじいちゃんやおばあちゃんを招待して、歌や踊り、手遊びなどを披露した。その後、一緒にゲームや食事をして喜んでいただけた。参加者は毎年増えてきている。雅老園とは日程が合わず行けなかったが、愛らいふには出かけた。回数を増やすことが課題である。

　陵西・大浜中学校の職業体験学習や保育実習を受け、生徒たちは保育士の仕事の大変さと大切さを学んでくれた。将来は保育士になりたいという生徒も複数いてうれしい。大仙・大仙西小学校の保育体験は昨年に引き続き実施し、好評である。園からは大仙西小学校の西の子まつりの参加や入学前の小学校見学(新湊と大仙西)をおこなった。共愛保育所とは５歳児を中心に交流し、行く学校が一緒の子を見つけ、友だちができたと喜ぶ子もいた。保育実習生とボランティアを積極的に受け入れた。短大は２校で３人、ボランティアは１名だった。

**６．研修ついて**

　市が主催する研修、府の委託を受けた研修、民間保育園保育士会や府の社協が実施する研修などを保育士を中心に受講した。特に市のアカデミー研修は一名が連続して受講し、職場研修のエピソード記述研修の際には積極的に進行指役割を果たした。人権研修は共愛保育所と合同で実施した。また、心肺蘇生法は２６年度も全職員が実地研修をした。

　12月29日には年間実施してきたグループ研修の発表会を実施した。4グループの発表で、十分な話し合いの時間はとれなかったが、学び合った。

　年間の自己研修を1冊のノートにまとめ、年度末の自己評価の際の添付資料とした。

幼稚園教諭の免許を取得していない職員が、半年間、短大に講習を受けに行った。また、通信教育を受講している職員もいて、いつこども園になっても、保育教諭として勤務することができるように準備が整ってきている。